Book Review 15-29 時代小説　＃またうど

『＃またうど』（著）を読んでみた。著者は京都大学法学部卒業。会社勤務を経て、司馬遼太郎家の家事手伝い、後に司馬夫人の個人秘書を務める。『マルガリータ』で第 17 回松本清張賞を受賞。『まいまいつぶろ』で第 12 回日本歴史時代作家協会賞作品賞、第 13 回本屋が選ぶ本屋大賞を受賞。

「またうど」とは、愚直なまでに正直なまことの者という意味だそうだ。徳川家重の言葉「この者は、〈またうど〉の者なり」をタイトルにしている。老中・田沼意次は本当に、賄賂にまみれた悪徳政治家だったのか、を本書で問いかける。

著者は前作『＃まいまいつぶろ』で第九代将軍・徳川家重と大岡忠光の関係に焦点を当てた。徳川家重は暗愚と疎まれた将軍であるが、本当なのか。口がまわらず、誰にも言葉が届かない。歩いた後には尿を引きずった跡が残るため、「まいまいつぶろ」（カタツムリ）と呼ばれ蔑まれた。『まいまいつぶろ』を読むまでそんなことは知らなかった。だが、ただ一人、彼の言葉を解する何の後ろ盾もない小姓・兵庫（大岡忠光）がいた。兵庫の口を経て伝わる声は本当に徳川家重のものなのか。誰にもわからない。将軍の座は優秀な弟が継ぐべきではないか、と疑義を抱く老中らが企み始める。そんな中で徳川家重は、いかにして将軍になったのかという小説である。

本作は、徳川家重・家治の時代を生きた田沼意次に焦点を当てて描いている。財源としての年貢が限界を迎え、江戸税制の改革者として商人にも課税。身分の低い者も実力さえあれば抜擢し、交易に役立つ俵物のため蝦夷地開発を決定。前例や格式にとらわれず、卓見と奮迅の働きで日の本を支えた田沼意次は、為政者が代わることで突如老中を罷免され領地を失った。

田沼意次の活躍した時代を著者は、『まいまいつぶろ』、『まいまいつぶろ御庭番耳目抄』（未読）、『またうど』の３部作として書いている。家重と忠光、家治と意次の主従関係を大変好意的に描いている。意次は長期的な展望で日の本の国、経済をまわすために、奮闘する政治家であるとしている。歴史の時間に教わった賄賂まみれの意次とは異なる人物が見えて来る。

徳川 家重は第 9 代将軍（在任：1745 年―1760 年）である。徳川吉宗の長男。

生来虚弱の上、言語が不明瞭（脳性まひによる言語障害、頻尿）であった。文武に長けた異母弟宗武と比べて将軍の継嗣として不適格と見られることも多く、吉宗や幕閣を散々悩ませたが最終的に吉宗は家重を指名した。家重の長男家治が父とは逆に非常に聡明であったこと、つまり次世代に期待ができると判断されたことも背景にあったと言われている。
家重の時代は吉宗の推進した享保の改革の遺産があり、綱吉が創設した勘定吟味薬を充実させ、幕府各部局の予算制度導入等、幾つかの独自の経済政策を行った。しかし負の遺産も背負うこととなり、享保の改革による増税策により一揆が続発し、社会不安が増していった。ただ、健康を害した後の家重はますます言語不明瞭が進み、側近の大岡忠光のみが聞き分けることができたため彼を重用し、側用人制度を復活させた。忠光が死ぬと、家重は長男家治に将軍職を譲って大御所と称した。享年 51。

田沼 意次は、老中。遠江相良藩の初代藩主。第 9 代将軍徳川家重と第 10 代家治の治世下で側用人と老中を兼任して幕政を主導した（田沼意次時代）。家重の将軍就任に伴って本丸に仕える。郡上一揆に関する裁判にあたる。家重が死去した後も、家治の信任が厚く、破竹の勢いで昇進し、2 万石の相良城主となって、老中格になる。この頃より、数々の幕政改革を手がけ、田沼時代と呼ばれる権勢を握る。
吉宗時代の質素倹約は、幕府の財政支出の減少のみならず、課税対象である農民にも倹約を強制し、それによって幕府財政は大幅な改善を見たが、この増税路線は家重の代には百姓一揆の増発となって現れ、破綻した。郡上一揆などの民衆の反発の激化と天災地災の多発から、幕府幕閣は米以外の税収入を推し進める。内容は株仲間の推奨、銅座などの専売制の実施、鉱山の開発、蝦夷地の開発計画、俵者などの専売、印旛沼等の干拓に着手するなど、田沼時代の財政政策は元禄時代のような貨幣改鋳に頼らない、さまざまな商品生産や流通に広く薄く課税し、金融からも利益を引き出すなどといった大胆な財政政策を試みた。
しかし、田沼時代の政策は幕府の利益や都合を優先させる政策であり、諸大名や庶民の反発を浴びた。また、幕府役人の間で賄賂や縁故による人事が横行するなど、武士本来の士風を退廃させたとする批判が起こった。都市部で町人の文化が発展する一方、益の薄い農業で困窮した農民が田畑を放棄し、都市部へ流れ込んだために農村の荒廃が生じた。大規模な開発策や大胆な金融政策など、開明的で革新的な経済政策と呼ばれる意次の政策は、いわば大山師的な政策だった。この時代、利益追求の場を求め民間から様々な献策が盛んに行われ、民間の利益追求と幕府の御益追求政治とが結びつき、かなり大胆な発想と

構想の政策が立案・執行された。だが、その収入増加策の立案、運用は実のところ場当たり的なものも多く、利益よりも弊害の方が目立つようになって撤回に追い込まれるケースも多発していた。同時に田沼時代の代名詞である賄賂の横行や幕府と諸藩との利益の衝突、負担を押し付けられた民衆との間に深刻な矛盾も生じさせた。このような風潮は「山師、運上」という言葉で語られた。しだいに利益追求型で場当たり的な面が多く、腐敗も目立つ田沼意次の政策に対する批判が強まっていく。意知の江戸城内での暗殺を契機とし、権勢が衰え始める。家治が死去後に老中を辞任させられ、財産の没収と江戸屋敷の明け渡しも命じられた。享年 70。